

農業土木を 支えてきた人々

吉植庄左衛門とその子孫たち

— 印 旛 沼 開 発 —

三 枝 昭 三*

印旛沼は昔から千葉県の顔という側面をもって知られている。そして今では人口急増を続ける本県の水がめとして、また工業用水、農業用水の水源として、さらには生活の場として県民に深い関わりをもって機能している。水資源開発公団の手で昭和44年3月、印旛沼開発事業が完了し今日に至っているが、その後、都市人口の流入が漸次印旛沼流域内に進み、また各種の開発の影響なども加わり最近では沼汚染の進行が目立ち、沼の恩恵を享受してきた県民にとっては大変憂うべき状況となってきている。いま印旛沼の豊かな水資源と緑に囲まれた美しい自然環境を守るため、県は印旛沼水質管理計画を策定して沼の環境整備を急ぎ、県民のみならず首都圏のオアシスとして親しまれる印旛沼の復権のために努力を傾けているところである。

I. 印旛沼開発の歴史的背景

栗原¹⁾氏は印旛沼開発史第一部上巻序説の中で印旛沼開発の意義として、次の三つをあげている。

第一は、ナショナル・プロジェクトという側面での印旛沼開発計画であり事業であったとしている。もっとも古い記録として残されている享保期の染谷源右衛門の工事から安永、天明、天保の工事に至る工事は幕府が総力をあげて取組んだもので、栗原氏はこれを当時のナショナル・プロジェクトと位置づけているのである。

第二は、第一の幕府政策に対し地元住民の対応であり、第三点は地元の動きに対する幕府の受止め方と、その施策の軌道修正という形でとらえている。さらにこの三点は徳川時代、明治、大正そして戦前はもちろん、現

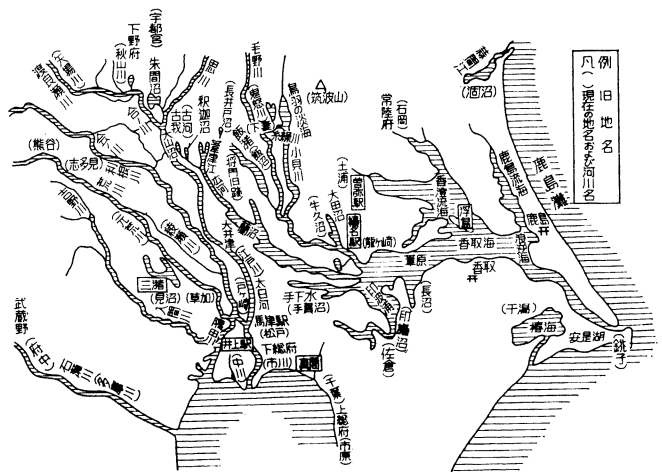


図-1 千年前の東関東の水脈略図

在でもあてはまる論点があり、印旛沼開発というテーマを将来にわたって展望する上で不可欠の視点となっているのではないかと思うのである。

第一点について氏は次のように述べている。

「印旛沼の疏水路の開削は、沼の干拓による新規開田と水害防除と舟運にあるといわれてきたが、歴史的にみるとそのようなローカルプロジェクトではなく、広く利根川水系全般にわたる広域開発を指向していたと思はれる……」(要約) また「徳川幕府が江戸を拠点とし、日本の経営の一環として印旛沼の開削を国際貿易の展開に結びつけようとしていたことが当時の世界的規模の大航海時代の影響の中でその底流にみられる」と。

第二点の地元住民の受止めについての分析では、「印旛沼はもともと常陸川の下流湖沼で、流域の小さい常陸川出水の洪水被害はほとんどなかったのが、水運を開くための利根治水工事(いわゆる利根川東遷)によって印

* 千葉県農業大学校・前千葉県耕地第一課(みえた しょうぞう)

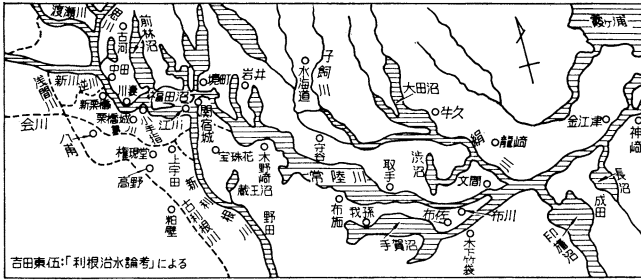


図-2 徳川初期の中利根の水脈図(寛永初年)

藩沼に利根川洪水が流入するようになり、地元民は被害者の立場に置かれ、その結果一つの抵抗運動として佐倉宗吾事件なども起きたのでは……」と見る一方、「時間的経過と共に住民に意識変化が起り対応姿勢をとり始め漸次積極化して今日に至っている」という考え方である。

ここで地元といわれる範囲は単に印旛沼周辺に止まらず広く利根川水系に及び、これらを一体化して治水、利水の広域的理解として経過してきたものと見なしている。

第三点では「国家的施策はその推進の過程で地元疎外や対立という形をとることが多い」ということを指摘し、印旛沼開削でも利根川東遷の強行策や、布川、布佐の狭さく部拡張、さらには印旛沼遊水池化のための将監川開削などもすべてその線上のものであったとしている。そして実際にはプロジェクトの推進、地元反対、修正の繰返しの中で原案の充実と質的強化という図式が展開されてきたのではなからうか。

以上、少し栗原氏の論点に固執し前置きが長くなった

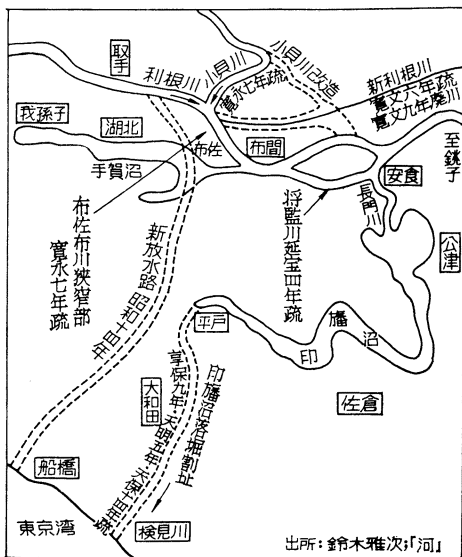


図-3 下利根・印旛水改修の推移

が、印旛沼開削が単にローカルプロジェクトではなかったという時代背景の上に乗って当時の事業に係わった人々の姿を見つめてみたかったからである。

II. 印旛沼開削の展開過程

印旛沼の開削、とくに疏水路の開削による水害防止と干拓さらに水運などの本格的開発は、徳川政権確立後八代将軍吉宗の享保時代(1724年)に始まり、続いて天明期の幕閣田沼意次による田沼工事、天保期の幕閣水野忠邦による水野工事を経て明治、大正そして昭和21年(1946年)に始まった工事まで10回の計画が記録に残されている。

開削の出発点は、印旛沼を利根川から遮断し洪水時における利根川の逆流を防ぎ、排水を江戸湾へ開流するという形であり、今日までその思想は一貫している。

ここに開削の目的を要約して挙げると、

- (1) 印旛沼周辺の水害軽減と防止
- (2) 利根川水系全般の治水計画の確立
- (3) 北総内陸部と東関東への水運体系の整備
- (4) 利根下流部(印旛沼を含む)の水資源開発

であり、以上の4項目が同時にまた相互に組合せられ各計画、実施の時点での基本政策として進められた。

III. 印旛沼開削の地元対応、その人脈

何といっても地元あるいは地元農民の立場からは水害防止という悲願が底流をなしていたことは事実であったろう。当時としては広大な工事範囲と領有関係が、天領、旗本領、諸藩領と土地が錯綜していたり、また何百町歩という大規模な巨大地主が存在していなかったこともあり、大工事を推進する基盤と、主体性が弱かったと推測される。したがって、個人や有志で治水、水害防止を提言するということもなく、当時としては幕府の指導力を待つという姿であったと思われる。

ところが300年来の幕府による執念に近い企画の中で地元の有志が広い地域にわたって提携し、互に父祖の業を伝え、これを確かな足どりを受け継がれているのが記録として残されている。つまり、印旛沼開削の計画や事業については、幕府がその主導を握っていたことと同時に、地元の人たちが積極的に計画の作成、設計にまで参加していたことがうかがえる。

たとえば、享保の工事は染谷源右衛門によって計画が樹てられ、地形に合せた水路が曲折しているのを後に地元から批判されたというし、安永、天明の計画では島田村の信田治郎兵衛が幕府の指示で水路を直線形に設計し

表-1 印 旛 沼 開 削 諸 計 画 案

年次 事 項	享保9年の計画(1724)	安永9年の計画(1780)	天明3年の計画(1783)	天保14年の計画(1843)	明治3年の計画(1870)
目 的	水害防止・(開墾)	水害防止・開墾	水害防止・舟運	水害防止・舟運	水害防止・(舟運)
着工の有無	着 工	な し	着 工	着 工	な し
期 間	享保9~?	—	天明3.7~6.8月	天保14.7.23~9.23日(61日間) 水野老中罷免による	計画期間(496日)
中止の理由	(資金の欠乏)	—	田沼老中罷免による	—	—
工事主体	村請負(染谷源右衛門)?	町人請負	公儀普請	五藩御手伝普請	佐倉県(堀田藩)
路 線	平戸~検見川	平戸~検見川	平戸~検見川	平戸~検見川	平戸~検見川 (佐倉~千葉(寒川))
延 長	9,384間(17,062m)	9,617間(17,486m)	—	10,494間(19,080m)	—
幅 幅	?	12間(22m)	6~8間(11~15m)	10間(18m)~7間	—

直したといわれている。このときは、利根川の洪水を沼に入れる、いわゆる利根分水の場合と単に印旛沼の内水処理の場合の指示に対して比較設計を行って疏水路の幅を前者20間、後者では6間で足りるという意見具申をしているのである。また天保工事では、疏水路の難工事区間についてボーリングを進めたことなどの記録があり、これらの実施設計書が下井(本埜村)の吉植庄左衛門の手もとに所蔵されていたということからも開発への関わりが深く理解できる。

1. 安永9年の計画

安永、天明期の印旛沼開削の計画は、安永9年(1780年)の水害が発端となっているといわれる。寛保2年(1742年)から天明6年(1786年)までの40余年間に合計8回、4~5年に1回の頻度で水害が起り、その傾向は梅雨期の長雨から末期の集中豪雨によるものと思われ、加えて浅間山の噴火(1783年)による降灰など当時の社会全体が自然現象の恐怖におののいたのであろうことが想像される。

安永9年の水害は利根川の洪水が印旛沼へ逆流し、水位が上昇し沼内水系の鹿島川、平戸川、神崎川の各流域が氾濫、ちょうど出穂期の稲作に大打撃を与えたと見られている。そこで幕府は、この対策のために積極的に取り組むことになったが、この点について明治期の織田寛之著「印旛沼経緯記」によると、「安永9年8月下総国印旛郡総深新田の名主平左衛門、島田村名主治郎兵衛連署して印旛沼開削の目論見書を幕吏伊達唯六に進達す」とある。また同じく「是より先幕府、平戸村より検見川海面(今の東京湾)迄を掘削し、印旛沼の水を洩放して新田を興し、併せて運輸の便を開かんことを企画し、平左衛門等に命じ其の目論見を調査せしむ」と書かれている。

地元のもので活躍したのは、前出の平左衛門(香取)と治郎兵衛の2人の奔走がとくに大きく、計画作成のほか工事の円滑化のため広く村々を回り、賛成の調印とりつけのための説得をはかったということである。この2人のほか多くの人の努力があったが、沼北部下井新田(今

の本埜村)の吉植庄左衛門は、このときの工事の金主であった大阪の豪商天王寺屋の現地案内に当り、庄左衛門宅に一行を泊め、もてなしている。

2. 利根川の締切り

開削事業のもう一つの要点は、沼へ利根川からの流入防止のための枝利根川(将監川)を本川から締切の計画を樹てたことである。まず、上流部と下流部の安食口を締切り、水門を設けて、印旛沼と利根川との舟運も図った。この水門はのちに明治期の利根治水の一環として将監川の方は大正2年(1913年)に、また安食口の方は調節門として大正11年(1922年)に竣功するまで実に150年の歳月を要しているのである。

3. 安永9年計画の特徴

幕府の当初設計は利根川治水として印旛沼を放水路とみなし、平戸から検見川までの開削にウエイトをおいたが、その後、安食口締切りで印旛沼を利根川から遮断する計画に変更となったため島田治郎兵衛の開削幅縮小具申が行われたということは前述したとおりである。

安食口の締切りについては、布鎌埜原惣代の下井新田庄左衛門が利根築堤に続く地元の懸案として水門の設置を強く陳情している。幕府の計画変更によって利根治水の構想は利根下流に被害を発生させるのではないかという懸念も当然あったと思われるが、田沼計画は印旛沼開削を第1段階、下利根治水は次の段階と分離して考えていたのではないかと、栗原氏はこのように見ているのである。またこの工事費の調達方法としては、目論見書

表-2 印旛沼新堀割御普請目論見(安永9年8月)
(島田村・信田次郎兵衛)

事 項	数 量	備 考
番号(区割)	1~190番	1区割当りおよそ2,500坪
堀割間数	9,617間(17,486m)	
坪 数	503,051.16坪 (別140万坪案)	平戸橋~検見川海 およそ300万m ³
人 員	2,426,425人	1坪当りおよそ5人 (1.5~8人)
夫 賃	1匁5分	
賃 銀	3,639匁643匁975毛	6,060両2分と13匁935毛

出所：織田寛之；『印旛沼経緯記』(外編)

明治10年の計画(1877)	明治35年の計画(1902)	大正10年の計画(1921)	昭和16年の計画(1941)	昭和21年の計画(1946)
水害防止・開墾・舟運 な し — 民間工事(開墾社)千葉県調査 平戸～検見川 7,094間(12,898m) 7～10間(13～18m)	水害防止・(開墾) な し 6 年 間 日露戦争勃発による公共事 業中止 千 葉 県 平戸～検見川 9,400間(17,100m) 標準断面45尺(13m強)	水害防止・干拓 な し — (農商務省食糧局) 平戸～検見川 4 里25町(18,430m) 33～120尺(10～36m)	水害防止・開墾・舟運 着 工 — 太平洋戦争勃発による公共 事業中止 内 務 省 湖北～船橋(昭和放水路) 29,000m 210～240m	水害防止・開墾 着 工 昭和21～44年 完 成 農林省・水資源開発公団 平戸～検見川 19,583m 25～60m

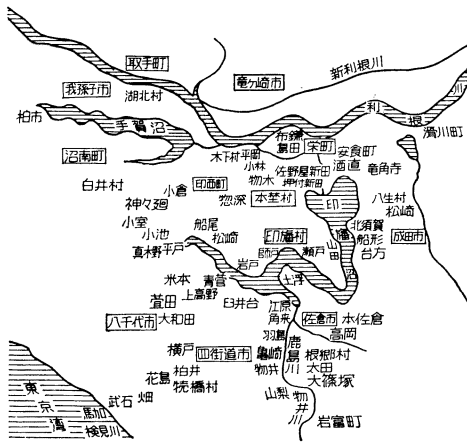


図-4 印旛沼開削計画の受益地一覧(安永9年計画)

によると大阪商人天王寺藤八郎、江戸浅草長谷川新五郎に出資させ、成功の後80%を金主に対し償却するという内容のものであった。いわば幕府の指導による町人請負という形で、今日の公共事業が民間活力を利用して推進してはといわれているのに類似している。

4. 天明工事の計画と経過

この計画は安永計画の平左衛門、治郎兵衛らの作成になる計画をそのまま採用したと思われる、利根川分水という性格を切捨て、印旛沼湖岸の治水と干拓に大きなねらいを置いたものと伝えられている。また同時に下利根を含む内陸水運路の改善も、この工事計画の重要目的をなしていた。そのため安食口を締切らず逆水水門が設けられることになり、かつて吉植庄左衛門が運動した陳情が実を結んだことにもなったのである。

IV. 吉植家と印旛沼

安永・天明の田沼工事の際、下井の吉植庄左衛門は島田村の信田治郎兵衛や惣深の香取平左衛門などと共に、幕府の指導のもとに利根治水と印旛沼開削の実現に夢をかけ新田開墾にその生涯を捧げた。

息子の庄左衛門もまた天保工事における地元推進者の

一人であった。この庄左衛門は明治14年(1881年)に死亡しており、その碑が現在本埜村下井の大日庵に建てられているが、これによれば彼は天保5年(1834年)中根の加藤家から吉植家へ養子入りしたと刻まれている。

1. 吉植庄左衛門

庄左衛門の活動を碑文でみると、文化12年(1815年)生れて加藤家の長男であるが吉植家を嗣いだ。中根の加藤家も印旛沼の治水に奔走していたらしく、そこで育った庄左衛門は碑文にも「長じて農業水利に留む」とある。沼の治水に一家を挙げて取組んでいた吉植家はあえて加藤家の長男を養子に迎えたものと思われる。天保14年(1843年)の印旛沼開削に際して、踏査、測量の道案内や作業監督に当たっている。この天保の水野工事に従事した彼は工事が挫折した後も努力を重ね、同志と図って明治2年の阿部計画(阿部善兵衛)にも参加している(碑文は孫廉一郎書)。

吉植家は代々庄左衛門を名乗っていたようであるが、幕末期には当主庄左衛門が私塾を開いている。

2. 吉植庄之輔

息子の庄之輔は幕末から明治にかけて活躍し、明治39年(1906年)61才で病没している。彼は埜原村長、県会議員を勤めるかたわら、織田計画(織田寛之による印旛沼開削計画)の促進に協力し、利根治水協会の設立に尽力した。

明治14年の県会で庄之輔は江戸川改修とケレップ工法(オランダ語で水剮)について質問し、その促進を強く提言し、河川水制についても才能を示している。明治の初年から20年代にわたり印旛沼開削に奔走した庄之輔は長男庄一郎の北海道移住申出に悩み、やむなくこれを承知しながら印旛沼の開発の悲願を幼い孫の庄亮に託すことで自制したらしい。後日、孫の庄亮はその著書「祖父の夢」の中で「祖父の開墾への夢の熾烈さは激しいものがあった」「祖先の幾人かが印旛沼の開疏に一生をささげ殆んど財産を傾け尽した人々もあって、祖先の念願のこもっている原野を受けついでいる限り開墾という仕事

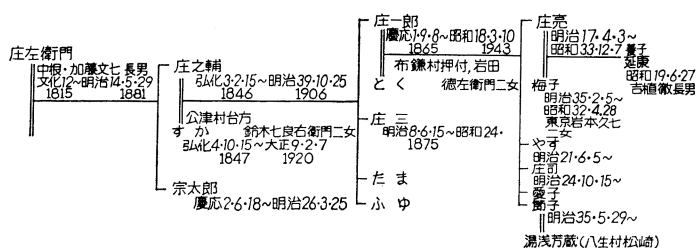


図-5 本塾村吉植家の家系

は吉植家の人々の天職となっている」としてしている。

3. 吉植庄一郎

庄一郎は慶応元年（1865年）生れで、千葉中学卒業後上京して私塾に学んだあと、明治18年21才で郷里の中根高等小学校長をつとめている。昭治10年代から20年代にかけての印旛沼の沿岸町村が大水害を受け、これを契機に庄一郎は利根治水協会を設立しているが、その本格的な活動を前にして、明治26年（1893年）、村民40戸を引率して北海道石狩川支流の恵岱別川に移住している。現在北竜町の和は吉植等の出身地埜原村の名をとったものと伝えられている。移住後10年余で帰郷して代議士に当選し、昭和5年（1930年）までの間、有力な政治家として活動し続けた。彼の政界進出を決意させたものの有力な要因は、明治25年から10年間に及ぶ北海道の移民活動であり、さらには印旛沼周辺の度重なる水害であった。前者は北海道の拓殖問題につながり、そして海外移民政策にまで発展した。後者は利根治水から干拓、開墾、土地改良に及んでいる。

議員活動と共に庄一郎が印旛沼の問題で地元に残した大きな功績は利根洪水の印旛沼への逆流防止工事で、この印旛水門は大正11年に完成した。この年の8月に発生した台風による水害には早くも多大の効果をあげ500町歩以上が被害を免かれたという。

庄一郎は印旛沼水門の建設によるほか干拓への情熱も開削へ寄せていた関心から想いは失せていなかったのであるが、昭和5年の総選挙で落選してからは再び政界へ出ることなく昭和18年本塾村で77才の生涯を閉じた。

4. 吉植庄亮

吉植一家の200年にわたる開墾、干拓の念願は庄一郎の長男庄亮によって受け継がれていった。庄亮は歌人伊藤左千夫とならぶ千葉県の生んだ歌人として評価されているのであるが、同時に水田の大規模経営の先達としても知られる人物である。庄亮は明治17年（1884年）生れで、父の庄一郎の北海道移住時代を祖父庄之輔の手で育

てられた。一高、東大と進み新聞記者として農業とは無縁な生活を送っていたが、祖父の没後は祖母と郷里で数年を過し、祖母の死後は再び東京で記者生活に戻っている。

安食水門は彼の帰郷時代に完成し、埜原開墾の可能性がでてきたのである。庄亮が開墾を思い立ったのは先祖からの天職といわれてきたばかりでなく、農業を一産業とみなし採算性のある企業であると確信を持

てる見通しが立ったからでもある。昭和3年に著した農耕余録の中で、「私の理想とする新農業をなすには日本の既成田では不便である。それは余りに小さく、余りに分散的である。私の理想は労力の半減と生産の倍加にある」と述べている。埜原の開墾は当時として画期的な大型トラクタ利用による大規模自作農経営を行ってきたが、昭和10年には集団の小作農場に変えている。このことは広大な耕地に集団的経営を取入れ、多数の農民を植させようとした意図で、県の内外から計20戸50人を入れたのであった。

有畜方式、共同作業場、倉庫も設置し水利施設も水源としてポンプ場も造るなど現在でも通用する、まことに斬新なものであった。

戦後の農地改革で吉植農場は強制的な解放の対象にならざるを得なかった。しかし、沼の開墾が天職の吉植家にとって、むしろこのこと自体は問題でなかったと思われる。庄亮はその後、農林省の干拓土地改良事業推進のため印旛沼・手賀沼土地改良区設立運動に後半生を捧げるようになった。

V. あとがき

栗原東洋氏の印旛沼開発史の中から印旛沼開発の歴史的背景、そして開削の経緯、展開に至る膨大な記述を読み、この開発にかかわった多くの先覚者たちの姿をうかがい知ることができた。編集委員会から依頼されたテーマは吉植庄左衛門であったが、吉植家5代250年間の印旛沼開発における足跡は、情熱で彩られた一大歴史物語を読んだ感銘深いものであったため、あえて一族について紹介させていただいた。今また、新しい印旛沼開発構想が水資源の確保と環境保全の面から議論が起きているが、過去の史実をふまえて政治、行政、地元の調和が大切なときであると思う次第である。

引用文献

- 1) 栗原東洋：印旛沼開発史（第一部上巻）